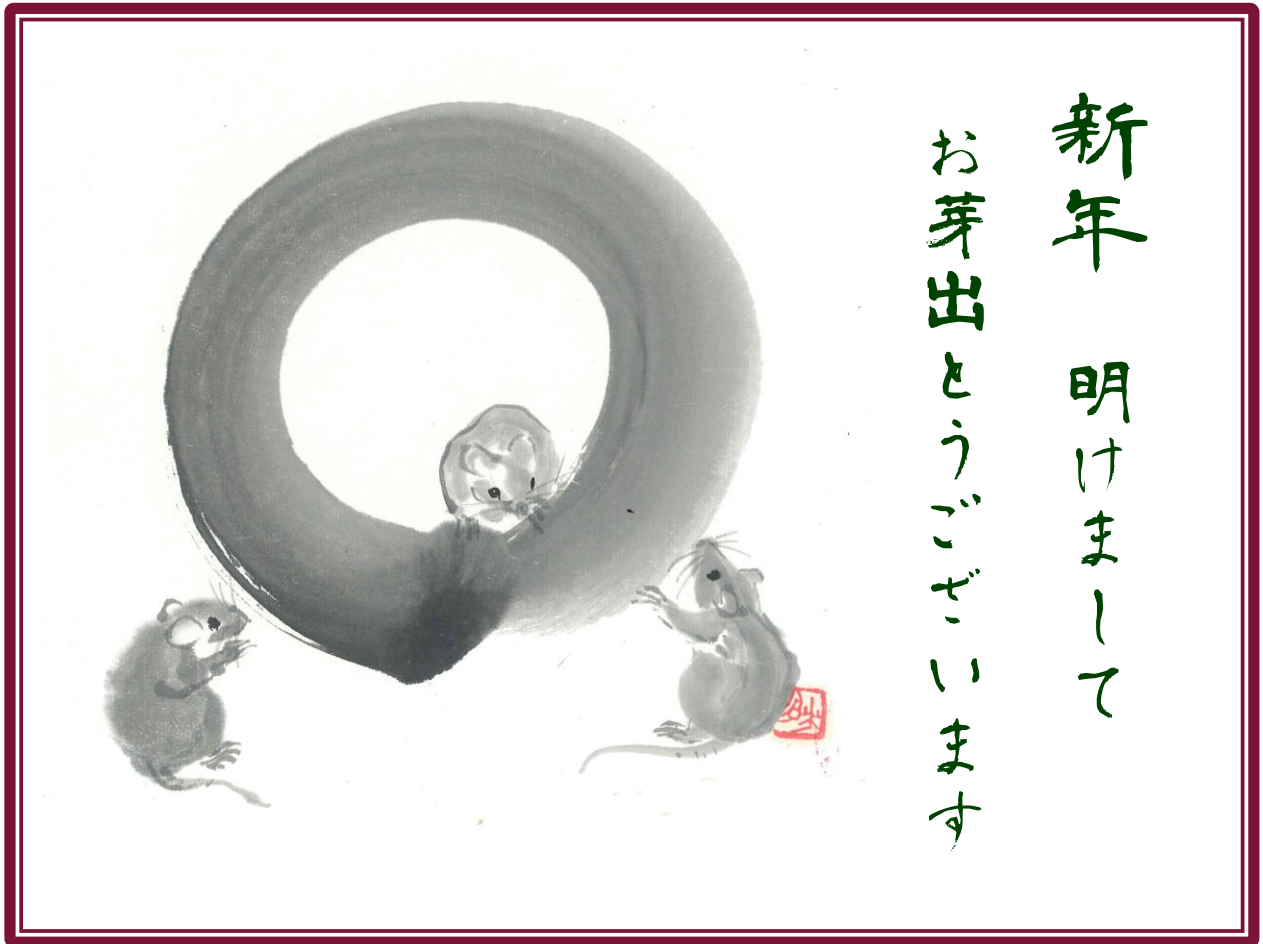


—令和2年睦月（1月）のことば—
むつき



新年 明けまして
お芽出とうございます

『^{しんねん}真念 ^あ明けまして ^{めで}お芽出とうございます』

新年明けましておめでとうございます。早速ですが、今年の干支にちなみまして『黑白二鼠のたとえ』と言われるお釈迦さまのお話を披露いたしましょう。

見渡す限り何一つない荒野を、旅人がさ迷い歩き続ける。すると突如、群れを離れ凶暴と化した巨像が、旅人を見つけ突進して来る。旅人は逃げに逃げたが、もはやこれまでと観念したとき、目の前に古井戸を見つけた。幸い藤蔓（ふじづる）も垂れ、それにつかまって枯井戸の中へとスルスル降りようとしたが、井戸の底ではあろうことか大口をあけた大蛇が待ち構えている。進退窮まり、中間にぶら下がって様子をうかがうこととした。しかし上の方で何やら奇妙な音がする。見れば何と黑白二匹の鼠が交互にカリカリと藤蔓をかじっているではないか。恐怖感にさいなまれていると藤蔓に咲く紫の花から、一滴の甘い露が滴り落ち、旅人の唇にポタリッと落ちた。旅人は巨像も大蛇も二匹の鼠の事も忘れ、蜜の豊渾にしばし酔いしれていた。

これはお釈迦さまが説かれた、無常の世を生きる私たち凡夫のサガを示したたとえ話です。荒野は「人生の荒波」、巨像は「あがなえない自然の力」でしょうか。井戸穴は「安住とおぼしき家庭」、藤蔓は「寿命」で、大蛇は「死の影」を指します。そして白黒の鼠は「昼と夜（時間の経過）」。そして最後の甘い蜜は五欲（煩惱）に惑わされ真理を見失いかねない私たちの危うさなのです。お釈迦さまはご自身の迷いと苦しみと、そして悟りの経験からこのように説かれ、警鐘を鳴らされるのでしょう。まずはこのようなおのれ自身の本性を知り尽くしてから「どう生きるべきか」を見る必要があります。以上「真念を明らかにして…」の所以（ゆえん）でした。